

新聞報道における女子アスリーのジェンダーに関する研究

上田 恵奈 (競技スポーツ学科 スポーツビジネスコース)

指導教員 片上 千恵

キーワード：新聞報道，女子アスリート，ジェンダー

1. 緒言

2012年に開催されたロンドンオリンピックでは、初めて全競技で女性競技者が出場した。オリンピックという国際的な行事になると、メディアの報道量は増し、関心も高まる。しかし、メディアが好んで取り上げる女性のスポーツはフィギュア・スケート、新体操といった女らしさを基盤にした競技種目である(橋本, 2002)。女性がスポーツに参入し、熱中すればするほど性別間の差異が可視化され、スポーツの男性中心主義に追随するというジレンマを抱えている。スポーツこそがジェンダーの支配構造を永続させる要因になるなら、スポーツのメディア表象へのフェミニスト批判を絶え間なく行うことが必要である。

2. 目的

本研究は(1)新聞報道における女性競技者の描かれ方を明らかにする。(2)読み手にとってどのようなメッセージを伝達しているのか明らかにする。そして(1)(2)で明らかになったことを踏まえて、一般紙とスポーツ紙、また競技間での比較を行う。

3. 研究方法

【調査①】ロンドンオリンピック期間中(2012年7月27日～8月12日)の産経新聞(以下、産経)、日刊スポーツ(以下、日経)の五輪に関する記事全体的な見出し、掲載面を抽出し、表を作成する。次に作成した表を参考にしながら、全記事についてジェンダー生産コードを読み取る作業を行う。ここでのジェンダー生産コードとは、「主婦」「家庭」「娘」「(名前)ちゃん」といった、女性は異性愛者であることが疑いのような、異性愛中心主義や女性や女性らしさに対する蔑視や偏見を内包した異性愛主義に基づいた単語を指す。(上野千鶴子「きっと変えられる性差別語—私たちのガイドライン—」を参照にワードを抽出)

【調査②】それぞれのジェンダー生産コードが読み手にとってどのようなメッセージを伝達しているのか文献から読み解く。

【調査③】調査①②で出た結果をスポーツ紙と一般紙、また競技間での比較を行う。

4. 結果と考察

抽出した見出し数は産経：324、日刊：753であった。ジェンダー生産コードは100あり、それらに該当する見出し数は産経：37(11.42%)、日刊：160(21.25%)であった。

ジェンダー生産コード該当上位5競技の一覧は以下の通りである。(その他とは、特定の競技ではなく複数の競技をまとめた女性の特集等、特定の競技に分類できない記事を指す。)

	産経	割合(%)	日刊	割合(%)
1	その他	66.67	トライアスロン	50
2	バドミントン	45	バドミントン	47.92
3	重量挙げ	38.46	卓球	41.54
4	体操	36.36	体操	37.5
5	卓球	19.23	セーリング	33.33

(ジェンダー生産コード該当数の割合=ジェンダー生産コード該当数/見出し数*100)

産経、日刊共に「愛称」「ファーストネーム」で呼ばれる選手がいる競技は極めて高い数値となった。また重量挙げとその他の記事を除き、全ての競技で日刊がジェンダー生産コード該当数の割合が多い結果となった。

5. 結論

ロンドンオリンピックの新聞報道ではジェンダー生産コードに該当する表現が多くあり、競技成績と関係のない報道内容や表記が目立った。しかし河野(2012)は、マイナースポーツが普及していくには、ルックス性で取り上げられる選手の発掘が必要で、メディアに取り上げられるようになることで注目を浴び、普及と競技人口の増加につながるとしている。マイナースポーツが普及していく手段として、メディアが大きな力となることは明らかである。オリンピックでメダル獲得を逃しても、なおメディア露出の機会を与えられるのであるならば、競技側にとってはジェンダー生産コードに該当する報道が非であるとは一概に言い切れない。

引用・参考文献

- ・飯田貴子(2003)新聞報道における女性競技者のジェンダー化—菅原教子から榎崎教子へ。スポーツとジェンダー研究1:4-14, 2003
- ・八木透(2007)民俗学におけるジェンダー研究と近代家族。佛教大学文学部論集第91号